奈良県国語教育研究会報
第114号
発行所
奈　良　県
国語教育研究会
発行人
会長 稲浦　寿子
事務局
広陵町立広陵西小学校
北葛城郡広陵町平尾542
☎0745－55－2388
FAX0745－55－6838

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

奈良県教育委員会事務局　学校教育課
指導主事　坂田喜昭

小学校では昨年度から、中学校では今年度から新学習指導要領が全面実施され、各校では児童生徒の資質・能力の育成に向けた授業が、日々行われていることと思います。

令和三年一月に出された中央教育審議会の答申では、教科等の特質に応じ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていく必要性が提言されました。

「個別最適な学び」とは、指導者が、児童生徒の一人一人の特性や学習進度、学習到達度に応じて、指導方法、教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うなどの「指導の個別化」と、指導者が一人一人の児童生徒に合った学習活動や学習課題に取り組む環境を提供することで、児童生徒自身が、学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」を学習者の視点から整理した概念です。

そして、この「個別最適な学び」が孤立した学習にならないように、探究的な学習や体験活動を通じて、児童生徒同士や地域の人たちと協働しながら、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を一体的に充実して行い、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行っていくことが求められています。

このような情勢の中、本年度行われた全国学力・学習状況調査の国語において、奈良県の平均正答率は、小学校・中学校ともに全国の平均正答率よりも低いという結果でした。中でも、目的意識をもって文章を読み取り、読み取った内容を適切にまとめたり、読み取ったことから考えたことをまとめたりする力に課題が見られました。また、児童生徒質問紙調査では、小学校・中学校ともに、「目的に応じて、自分の考えとそれを支える理由との関係が分かるように書いたり表現を工夫して書いたりしているか」や「目的に応じて文章を読み、感想や考えをもったり、自分の考えを広げたりしているか」といった、国語の学習に関わる質問事項に対する肯定的回答の割合は、全国と比較して低い傾向にありました。

これらのことから、これまでも「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が行われてきましたが、児童生徒自身が、自ら主体となり目的意識をもって学習活動に取り組む授業となっているかを再度見直していく必要があると考えます。

授業づくりを行う上で、授業者が学級の児童生徒の実態を正確に把握するとともに、それを基に児童生徒の興味・関心・意欲等を踏まえ、指導に生かしていくことが大切です。普段の学習活動の中で、単元で身に付けることを目指す資質・能力は何か、そのために一時間ごとの授業では何を学習していくのかを、児童生徒自身が理解し、常に意識しながら学習できるようにすることで、自ら目的をもって文章を読んだり、そこから感想や考えをもったことをまとめたりするなど、主体的な学習を進めていく際に、単なる話し合い活動になっていないかを確認してくことも大切です。学習活動が、他者との協働的な学習を通して、付けたい資質・能力につながる視点が広がったり、考えが深まったりしたことを児童生徒自身が実感できるようなものになっていることが重要で、このような児童生徒の学習状況を見取る場面を設定していく必要があります。

このように、しっかりと児童生徒の学習状況を見取り、児童生徒の興味・関心、意欲等を踏まえ指導に生かす「個別最適な学び」と、他者との関わりを通した学習の中で、新たなことを創り出すような「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくようお願いします。

冬季研究大会講師　しんちゃん（三浦伸也）先生のご紹介

一九六二年生まれ。二〇〇二年、絵本を読むことを生業としてからは、保育園、幼稚園の子どもたちだけではなく、幅広い層に広がり、講演依頼は年間約三〇〇本にのぼられます。二〇一一年三月の東日本大震災では、発災一カ月後から現地に入り、現在も絵本を読み続けられています。また、毎年ニュージーランドに出向かれ、現地の子どもたちに絵本の読み聞かせをされています。二〇一八年四月からは、障害をもつ子どもたちを育む療育施設「ほがらかファミリー音羽」を開設されました。

特定非営利活動法人ほがらか絵本畑理事長、株式会社ほがらかカンパニー代表取締役社長。

・『いつだって子どもがいちばん』自由国民社　二〇一五年

―冬季研究大会要項―

期　日
令和四年二月十五日（火）

会場及び実施方法
奈良県立教育研究所及び、奈良県立教育研究所からの、Google 社 Meet を利用した動画配信

日　程
12時45分～13時　受付
13時～13時15分　開会行事
13時15分～15時　分科会

「令和三年度国語学力診断」集計結果報告・学習指導法の提案及び研究協議

	提案者	助言者
小学校低学年	竹綱　秀起（忍海小）	上田　恵子（たかむち小）
小学校中学年	江口　雄祐（畝傍北小）	豊田奈和子（片桐西小）
小学校高学年	辰巳　彰吾（大淀緑ヶ丘小）	松本　大輝（新庄小）

司　会
中背　真一（三郷北小）

指導助言
鎌田　明美（新庄小学校校長）
15時～16時30分 特別講演

演　題
「子どもから学ぶ」
ほがらか絵本畑
理事長　三浦伸也 氏

16時30分～16時40分　閉会行事

国語学力診断に対するご意見から

本年度の「国語学力診断」は、小学校、約五万五千部のご採用をいただきました。また、結果集計にもたくさんのご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

児童の学力傾向や実態、国語学力診断に関してお寄せいただいたご意見の一部を紹介いたします。

〈小学校低学年〉
・文章の内容はおおよそ理解できているが、普段からの読書量が少なく、絵本からだんだんと文字数のある本に移行していき、読む経験や時間を増やしていくことが大切だと思う。
・内容を順番に並び替えることが苦手だと分かった。
・一年生の（２）は読み飛ばしの無回答が多かった。番号に○をつけさせるのではなく、「一つ選んで（　）に○をつけなさい」のようにすると見逃しはなくなったと思う。
・拗音、長音、促音を正しく言えても、正しく書けない児童が多かった。
・一年生の書くことでは、週末の日記指導の定着により、知らせたいことについてはほとんどの児童が書けていた。
・二年生の（５）では、文章を繰り返し読まず、先入観や直感で選択している児童が多かった。場面を想像して読ませるような手立てが必要だと思った。
・二年生の読むことでは、心情を考えたりすることが難しかった。
・二年生の書くことでは、行動については多くの児童が書けていたが、様子について書いていた児童はあまりいなかった。

〈小学校中学年〉
・三年生（５）は「言い聞かせる」という言葉に着目できず、「だいじょうぶ」という文字通りに受け取った児童がいた。
・四年生（３）の順序や（７）の全体像の把握ができていない様子が目立った。
・日頃より文章に親しめるような工夫をしたり本を読むことを促したりして、話の内容を想像する力を身に付けさせていく必要があると感じた。
・漢字については、日常生活の中で漢字を使う児童が少ないことから小テストなどで復習を行っているが、なかなか定着しない。今後も続けていく必要がある。
・丁寧な言い方に直す問題が苦手な児童が多く見られた。
・主語と述語の関係などの文法の力が身に付いてないと感じた。
・書くことについては、身近な生き物を用いたものだったため、子どもたちにとって取り組みやすかったように思う。
・三のような文章を書く力は、今後も学習させて付けていく必要がある。

〈小学校高学年〉
・問題用紙と回答用紙が別々になったことで見やすくなった。
・五年生（５）では、「（文の）初めの五文字（を書く）」という問いに慣れていないのもあるが、様子が書かれた一文が見付けられていなかった。
・六年生（４）では、傍線部分の直近の言葉を選んで書いている児童が多く見られた。
・二の言語の問題の正答率が低い。テスト後、やり直しが必要と感じた。
・修飾と被修飾の関係が少しややこしくなると誤答が多くなると分かった。
・三では、保健の先生のお話はきちんと踏まえているが、適切な文末表現にせず、自分の言葉として文に使っている児童がほとんどだった。
・「引用」ではなく、「保健の先生から聞いたことが分かるような書き方で」などのような問い方だと、書けたかもしれない。

素材文や設問についてのご指摘やご意見は、本学力診断が児童の実態を把握するためにより適切な診断となるよう、今後の参考にさせていただきます。

児童の学力傾向や実態に基づく授業改善については、冬季研究大会の研究協議のテーマとし、また、県内の全小学校に配布する「国語学力診断結果報告書」にその資料を掲載します。ご活用いただきますようお願いします。

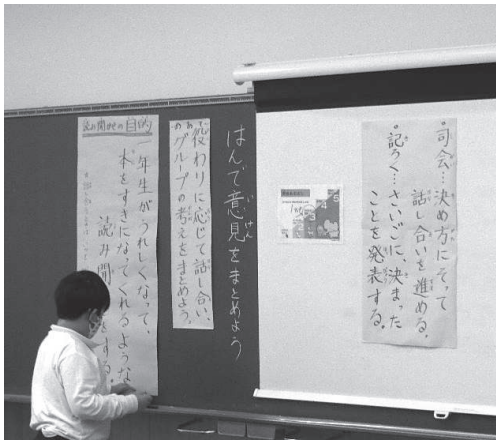
令和三年度 秋季研究大会をふりかえって

事務局　東　実　樹

木々が美しく色づき、秋の深まりを感じる十一月五日、曽爾村立曽爾小中学校にて、本年度の秋季研究大会を開催いたしました。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、Ｇｏｏｇｌｅ社によるＭｅｅｔを利用した動画配信による実施となりました。

会場校である曽爾小中学校では、研究主題を「表現につながる、思考力の向上をめざして～へき地・小規模校の特長を生かして～」として、研究に取り組んでこられています。学習公開では、低・中・高学年それぞれから一年・三年・五年の学級の授業を公開していただきました。どの学年も、ＩＣＴを活用し、情報の整理をしたり共有したりすることを通して、自分の考えを深める場面を設定されており、児童の思考力を高めるための手立てが明確に示された授業でした。

低学年では、インタビューを通して伝え合う力の育成を目指した授業でした。



児童がインタビューをした映像を撮影し、振り返ることで客観的に自分自身の質問の仕方や答え方だけでなく、友達の良さに気付く授業でした。

中学年では、一年生に読み聞かせをする本を選ぶための話合いが行われました。主体的に目的意識をもって取り組めるように、司会の進行表や発言例などの表を活用し、話し合われました。

高学年では、グラフや図表が自分の考えの根拠になっているか、段階を踏み、意見文を書く授業でした。端末を使用しながら、意見とグラフを結び付け、自分の考えを明確にしていく課程が示されました。

分科会では、本会の研究主題である「付けたい力を育む『読むこと』の学習活動の創造～説明的文章における学習過程の具体化～」を目指した研究と授業実践の報告を行いました。

本会では、「全国学力・学習状況調査」や本研究会が実施している「奈良県国語学力診断」の結果から「読むこと」に課題があると分析し、今年度より読む力の向上のため、指導の在り方を追究してきました。どの部会も付けたい力を明確にしたうえで、言語活動がそれに適しているか吟味しました。意見交流なども効果的に取り入れ、ワークシート等にも工夫を重ねた学習過程の提案がなされました。

研究協議では、参加された方々とオンラインを通じて、感想や読むことにおける取組について意見交流がなされました。

大会記念講演には、作家の寮美千子先生をお招きしました。「詩が開いた心の扉～奈良少年刑務所　絵本と詩の教室～」という演題のもと、先生が奈良少年刑務所で行った社会性涵養プログラムでの子どもの変化を中心にお話しいただきました。

社会性涵養プログラムとは、いわゆるじわじわと心を育てるプログラムです。絵本の読み聞かせや朗読劇をし、周りに拍手されるなど受け止められることで、小さな自己肯定感が芽生え、自己表現ができるようになるという変化がプログラムを受けた全員にあったと語られました。印象的だったのは、寮先生が子どもから言われたとおっしゃった言葉です。

「穴の上から引っ張ってくれた人もいたし、穴の下に来ておしりを上げてくれた人もいました。でも先生は、穴の中の下まで下りてきて、隣に座ってくれました。」

子どもの心に寄り添うという本当の意味を示していただいた気がしました。学習指導要領の中で、学力の三つの柱のうちの一つは「学びに向かう力、人間性の涵養等」とされています。人間性の涵養や自己表現ができる背景には、自己肯定感が必要不可欠で、周りの受け止めも大きく影響してくるのだとご教授いただきました。

本研究会では、今後も研究と実践を進めていき、付けたい力を育む学習過程の創造を目指してまいります。

「やってみたい」を引き出す授業を目指して

宇陀市立室生小学校　神野　洋行

「余裕がなくて、なかなか授業を楽しめない。」これは数年前まで私が国語科の授業について感じていたことです。教材研究を行い、自分なりに授業の展開を考えて行っていたのですが、なかなか思ったように進められず、授業しながら「どうしよう」と困ってしまうこともありました。そこで、先輩に話を聞いたり、県国研に参加し研究員として研究を進めたりしているうちに、私の授業のゴールのイメージが曖昧だったことに気付きました。ゴールが明確ではないので、私も子どもたちも授業を探り探りで進めることになり、自信をもって楽しむことができなかったのです。

それから今までの教材研究の方法を見直しました。一つは、魅力ある言語活動を設定することです。子どもたちが「やってみたい」と感じ、付けたい力が確実に身に付くように意識することで教材研究をすることが苦ではなくなり、むしろ楽しいと思えるようになってきました。何より、ゴールと付けたい力が明確なので、授業の中で子どもたちが自信をもって活動するようになりました。もう一つは、子どもたちが「必要感」をもって授業に向かえるようにすることです。授業を進めていく中で子どもたちが自然と「ゴールを達成するためにこの力を付けたい」と思えるようにすることで、子ども自身が自ら考え、工夫するようになると考えました。

今年度の秋季研究大会では、中学年部会の先生方とともに「要約」についての実践発表をさせていただきました。学習指導要領解説には、「要約するとは、文章全体の内容を正確に把握した上で、元の文章の構成や表現をそのまま生かしたり自分の言葉を用いたりして、文章の内容を短くまとめること」とあります。この要約という力に必要感をもたせることのできる言語活動の設定に悩みました。日常の中で要約の力が使えそうなものは何か考えているときにふと、テレビのニュースが頭に浮かびました。ニュースで出来事を伝える場合、ある程度内容をまとめて伝える必要があります。そこで、言語活動を「中心となる語や文を見付けて要約し、ニュース原稿を作る」と設定し、ニュースキャスターになり、自分で作った原稿を使ってオリンピック競技についてのニュース映像を作ることにしました。そうすることで、日頃様々なメディアに触れている子どもたちが要約することに必要感をもち「やってみたい」と思えるのではないかと考えました。授業の中で子どもたちは、元の文章とにらめっこしながら要約していました。普段、文章を書くのが苦手な子が「先生！見て！原稿できた！」と目を輝かせて見せに来てくれたことはとても印象に残っています。

今までは教材研究といえば、「時間がかかり、大変なもの」というイメージもありましたが、前述のような視点をもって行うと「時間がかかってもやりたいもの」になりました。もちろん、短時間で魅力ある活動を設定できることが一番ですが。これからも子どもたちとともに楽しみながら確実に力を付けられる授業づくりを行っていきたいと思います。

ことばを育てる

広陵町立広陵西小学校　東田　兼一

私が教師として一番大切にしていることは子どもたちの「思いやりの気持ち」を育むことだ。そのために、言葉を大切にできる子どもたちになってほしいと願い、子どもたちと接している。今年度で教師になって十一年目になる。その中で様々な家庭環境で育つ子どもたちを見てきた。どんな家庭環境で育った子であれ、相手の立場に立ち、思いやりの気持ちをもって、他者と接する力があれば、きっと生きていけると信じて、日々の授業づくりや学級経営を行っている。

そんな私が国語の授業で意識して実践していることが三つある。一つ目は、日常的に辞書を使わせ、子どものたちの言葉を増やすことだ。子どもたちには、「分からないことは良いことです。ただ、分からないままにすることは良くないことです。だから、分からないことはすぐに調べましょう。」と日々伝えている。言葉は知らないと使えないし、言葉を知っているからこそ、様々な表現ができる。二つ目は、音読指導を丁寧に行うことだ。言葉は読めないと書けない。また、読めないと理解できない。スラスラと正しく音読できることは、言葉を理解するために必須だと考える。そのため、音読の指導は丁寧に行っている。三つ目は、子どもたちに自分を俯瞰させることだ。書く活動では、クラスで共通理解した訂正の記号を用いて推敲をさせている。また、話す活動では、日直のスピーチをＩＣＴ端末で撮影し、後で自分のスピーチの動画を見て振り返りをさせている。自分を俯瞰することで、身に付く力はより大きくなると考えている。

実は私は、国語の授業づくりはとても苦手である。今年度初めて奈良県国語教育研究会の研究委員になった。そして、幸いなことに実践発表の機会もいただけた。分科会の先生方からは、授業は子どもの実態に合わせるものだということを改めて学ばせてもらった。先生方は、「学級の子どもたちは、どんなことができて、どんなことができませんか？」「学級の子どもたちに合った活動ですか？」と私に何度も確認してくれた。委員になるまでの私は教育書やセミナーなどで知識を蓄え、様々な指導方法を使っていくことにこだわってきた。しかし、うまくいかないこともたくさんあった。子どもたちの実態に合った指導方法を選択しなければならないのに、逆のことをしていたのだ。分科会の先生方と悩み、考えながら授業づくりをして、基本的だがとても大切なことを再認識できた。

一つ一つの言葉を大切にできる子どもたちを育てるために、子どもたちの実態をしっかりと理解し、国語だけでなく、教科横断的に子どもたちに力を付けていきたい。

編集後記

この度は、学力診断採用ありがとうございました。今後も、県内の国語教育の動向を知る情報誌として、紙面の充実を図っていきたいと思います。ご示唆、情報等おありでしたら事務局までお知らせください。（東）